助産院紹介

山本助産院

【院長】山本詩子さん 横浜市金沢区

【なりたち】
仕事から離れ子育てをしている時に、夫から「自宅で開業したら？」と言われたのが開業のきっかけとなりました。最初はお産開業するつもりはなかったのですが、ひとりの女性にお産介助を頼まれたことや周りの後押しがあって、お産開業をすることになりました。今では多機能型助産院として地域に根差した活動を行っています。今後は一般社団法人を取得して、後継者の皆さんに更に山本助産院を発展させていってほしいと思います。

【院長メッセージ】
明るく、元気に、楽しく、健やかにをモットーに日々過ごしています。現在各部門のスタッフを合わせると60名ほどのスタッフになります。それぞれの部門に責任者がいて事業を運営しています。
各部門のスタッフ同士や、お母さん同士、地域と助産院を「つなぐ」ことが私のお役目と思い、大切にしています。

山本院長とスタッフの皆さん

つくい助産院

【院長】早船美和さん　相模原市緑区

【なりたち】
前院長の長さんが一生仕事するんだったらと思って看護師の免許取りましたが、人が亡くなるのは大変だと思った。人が生まれる方へと思って助産師の道を選んで平成8年に助産院を開業しました。その助産院で手伝っていく中で私が習ってきたアロマとかもそういうのも取り入れられ面白いなと思った。助産院を繋げるために引き継いだ。

【院長メッセージ】
先輩助産師が開業すると十倍大変だけど十倍喜びとなると教えてくれた。だから助産師って女性の一生に寄り添う仕事だから 妊娠出産だけではなく、学校での命の話や更年期の方へのお話し、人生百年になったからそれに伴走できるように助産師はどんどん幅が出てくると思う。ぜひ自分次第で仕事をしていってほしい。

院長の早船さんと前院長の長愛子さん

すくすく赤ちゃん献金表彰の授与させていただきました！

長年すくすく赤ちゃん献金にご協力頂いているJINオリエンテーションスタジオ様に8月27日に開催されたイベントにて岡本登美子会長より直接表彰の授与をさせていただきました。イベント内では上田邦枝教務部会理事の講座もあり、大好評でした。

※すくすく赤ちゃん献金は全国の助産院に「おぎゃー献金箱」を設置し、昭和42年以来、集まった献金で全国の福祉施設に必要な備品などを贈呈してきました。平成12年、本会では、この事業をより充実、発展させるために、「すくすく赤ちゃん献金」と名称を変更し、収益金は主に、児童福祉施設への必要備品贈呈などで、役立たせていただいています。

各種はらまき　ニット生地
千葉県野田市木間ヶ瀬 3292
tel:04-7198-1313　fax:04-7198-6117
ルビー本舗

公益社団法人　神奈川県助産師会
〒231-0037
神奈川県横浜市中区富士見町3-1
神奈川県総合医療会館6階
TEL: 045-262-4201
E-mail:office@kanagawa-josanshi.com
HP:http://kanagawa-josanshi.com/

事務局より

２０２４年度年会費の振替日をお知らせします。
１回目：２０２４年２月２６日
２回目：２０２４年３月２５日
（残高不足の方のみ）

編集後記

様々な場所に取材で伺うことが楽しいと感じています。気になるという方はぜひ広報委員会にお待ちしています。（野村）

公益社団法人　神奈川県助産師会　ニュースレター
みらい
2023年12月 VOL.19

会長あいさつ

2023年5月8日新型コロナ感染症の位置づけが5類になり、周産期における環境も緩和され日々の生活が変わりつつあります。様々な激動の中、ITを駆使したオンライン活用の研修会企画は、他職種技術者の協力もあり、充実してまいりました。事業運営では神奈川県健康局増進課からの委託事業も拡大され「若年妊娠SOS相談事業」をLINEや電話相談員を会員から発掘し担っています。内容は県と情報共有報告し検討を図っています。
9月には災害対策訓練を逗子市の聖和学院で地元の関係団体や委員の協力のもと実施しました。
当会では皆様が安心して活動できるようサポートメンバーに、アドバイザー医師、顧問弁護士に入って頂いています。今後も専門職能団体として、関係団体と顔の見える関係性を作り母子保健推進のために継続的な活動を発展させていきたいと考えております。

会長　岡本　登美子

妊娠SOSかながわ報告

事業統括理事　又木　由美

神奈川県から当会が若年妊婦等支援業務「妊娠 SOS かながわ」を受託し 3 年目になります。 今年度は、電話と LINE 相談の事業内容が拡大されました。LINE相談は毎日になり、相談件数は増加し、継続的な相談も増えています。相談の多くは、予期しない妊娠に悩む女性や パートナーからの相談です。その他、身体の状態について、経済的な悩み、緊急避妊薬、ピルの相談等多岐にわたります。相談者は 8 割が女性であり、年齢は 10～20 代が多いです。 相談員は相談者の悩みを傾聴し助言や情報提供を行い、相談者が意思決定できるよう支援しています。緊急対応が必要な事例は、県の保健師と連絡を取り合い、相談者に寄り添いながら速やかに地域に繋いでいます。

神奈川県助産師会の災害への取り組み

災害対策委員会主催災害時避難訓練開催報告
『今、考えて動いてみよう！備え行動と災害時避難訓練
ー日々の備え行動から災害時の福祉避難所の生活ー』
災害対策委員　羽太千春

　毎年企画している災害時支援協力助産師を中心とした避難訓練で、今年度は1月に神奈川県助産師会と災害時派遣協定を締結した逗子市にある聖和学院の協力を得て、妊産婦・母子専用の福祉避難所における支援を想定した訓練を開催したため報告します。
　残暑厳しい中、会員27名に加え、逗子市防災安全課、逗子市災害ボランティアネットワーク、逗子市議会、逗子市医師会、鎌倉市保健福祉事務所等、地域からも多数ご参加いただき、ハザードマップや避難所マップの活用方法を学んだ上で、避難所開設後の実践的な訓練とディスカッションを通して、避難所運営に女性や子どもの視点を取り入れる必要性や日頃から地域や関連団体との連携を図る重要性について考える機会となりました。今後は支援に必要な知識やスキルを学びながら災害時支援協力助産師同士の交流を深められるような内容も検討しつつ、様々な災害や地域を想定した避難訓練を継続していきたいです。

災害時対応の研修を担当して
教育担当　小野芙由子

９月９日に災害時対応の研修をオンラインで開催し、県内施設から49名の方が参加しました。横浜市立大学大学院医学研究科産科婦人科学講座教授の倉澤健太郎先生からは、災害時における周産期医療体制の現状と連携の必要性について、ご自身の被災地支援の経験を交えてわかりやすくお話し頂きました。独立行政法人国立病院機構横浜医療センター助産師、副看護師長の羽太千春先生からは、災害に備えた助産師の役割と行動を具体的にお話し頂きました。グループワークでは、自施設における災害への備えを共有しました。参加者からは、「グループワークでは他施設の状況を知ることができた」、「学びを自部署スタッフに伝達し災害への備えを一緒に考えていきたい」などの感想がありました。他施設の情報に関心を持ち、日頃から連携することが災害時の妊産婦・子どもの支援につながると感じました。教育担当では下半期もいくつかの研修を企画しています。ぜひご参加いただき、他施設との交流の機会にしていただけたらと思います。

上田理事より趣旨を説明

グループワークでは顔の見える関係を構築

羽太さんより災害マニュアルについて説明を受ける

災害時避難訓練に参加して

　昨年に引き続き、今年は福祉避難所となる逗子市の学校の見学をさせていただきました。残暑の暑い体育館で被災時のシミュレーションを行い、「1分で決めましょう！」という声がけがあり、参加者の皆さんが戸惑いながらも書き出された役割を手を挙げ自主的に動く姿に感動しました。私は災害時支援協力助産師として登録はしていますが、自分も被災した場合活動出来るのだろうかと不安がありました。しかし、家族や職場の理解を得ることや自分の身を守ることが優先であること、今後のために自分の地域の避難訓練に積極的に参加することが大切と改めて確認できました。他の助産師の方々とも顔の見える関係であることも非常に大切であると感じた訓練でした。自分のためにも繋がる災害時支援協力助産師の登録をぜひお勧めします。
（取材：野村）

岡本会長とともに学校内の避難所を見学

分娩介助セットを熱心に見る参加者の皆さん

対応シミュレーションを積極的に行う

「とわの日」４年ぶりに開催！！
とわ助産院　院長　山本年映

　10月7日（土）とわの日を開催しました。研修室では、ストレッチヨガ、ミニいのちのはなし、手遊び紙芝居などをおこない楽しみました。また無料母乳相談、ベビーアート、鍼灸体験、リンパケア体験などのコーナーを設け行いました。鍼灸体験は１５分ワンコインで、気ななるものの入りにくい鍼灸が体験できるのは人気でした。30組ほどの母子・家族が来院してくれました。とわで出産された方とは懐かしい再会をしたり、地域の母子と楽しい時間を過ごしました。助産院に初めて足を踏み入れたお母様もいらしていただき、助産師の存在をよく知ってもらう機会として小規模でも毎年続けていきたいと思います。